

『仏説大東亜戦争』の原点を探る (「アジアは一つ」の再発見)

平成 28 年 10 月 25 日

敏 翁

1. はじめに

昨年夏小生が構想した私論『仏説大東亜戦争』は、北一輝の生涯を日本に革命を期して行った捨身供養と捉えた安岡正篤の碑文がヒントになって、大東亜戦争を日本民族が「東亜の解放」を願って行った捨身供養と捉える事が出来ないかと考えたのが発端でした。

そして日本民族が仏教伝来の当初から捨身供養の考えを受け入れていて、ある種の憧れをもって表現していた「捨身飼虎図」があり、これは日本民族の性情の特筆を表しているとの記述を矢代幸雄著「日本美術の特質」に見つけ出して一先ず拙論を構築する事が出来たのでした。

次いで『「仏説大東亜戦争」関連書籍』において、大東亜戦争の歴史的評価書、北一輝関係書籍や「日本美術の特質」についてレビューを行いました。

さらに、『華嚴経と捨身』では、本邦に捨身供養の考えが根付き継続される事に関する重要人物として華嚴宗の明恵上人、北条泰時に触れ、その思想の原点である「華嚴経」を読み直し、その中における「捨身」の位置付けを探りました。

本掲載では、「捨身供養」という考えが成立するための前提となると思われる「輪廻転生」思想誕生の原点を主として中村元選集(決定版 全 32 巻 春秋社発行)の中に探りました。

さらに大野晋氏による日本語タミル語起源説の考えを加える事によって、インド、中国、朝鮮半島及びその周辺の諸民族が発想練磨した思想が、本邦に到達し、本邦で独特に培養されたその精華の発露が『仏説大東亜戦争』であって、その中に「アジアは一つ」というメッセージを新ためて再発見するに至ったのです。以下にその議論の推移をご覧に入れます。

上記赤枠は何れも本ホームページに掲載されたもので、クリックすればご覧頂けます。

(その中から、小生のブログの記述などにも到達可能です)

2. 中村元選集(決定版)

前回掲載した『華嚴経と捨身』の最後に記した様に、中村元選集(決定版 全 32 巻別巻 11 巻 春秋社発行)の中から関係のありそうな巻を選んで目を通す事にしました。

本選の全容は次の通りです。

第 1 巻 『インド人の思惟方法 東洋人の思惟方法 I』

第 2 巻 『シナ人の思惟方法 東洋人の思惟方法 II』

第 3 巻 『日本人の思惟方法 東洋人の思惟方法 III』

第 4 巻 『チベット人・韓国人の思惟方法 東洋人の思惟方法 IV』

第 5 巻 『インド史 I』 第 6 巻 『インド史 II』 第 7 巻 『インド史 III』

第 8 巻 『ヴェーダの思想』 第 9 巻 『ウパニシャッドの思想』

第 10 巻 『思想の自由とジャイナ教』

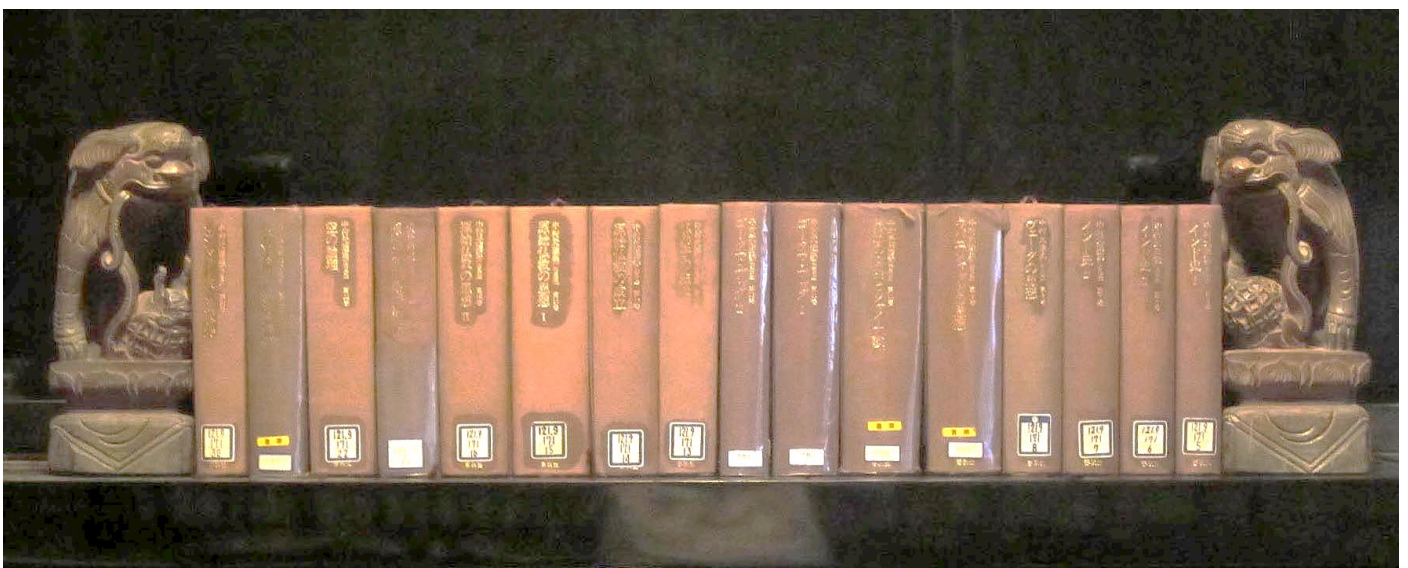
第 11 巻 『ゴータマ・ブッダ I 原始仏教 I』 第 12 巻 『ゴータマ・ブッダ II 原始仏教 II』

- 第13巻 『仏弟子の生涯 原始仏教 III』
- 第14巻 『原始仏教の成立 原始仏教 IV』 第15巻 『原始仏教の思想 I 原始仏教 V』
- 第16巻 『原始仏教の思想 II 原始仏教 VI』 第17巻 『原始仏教の生活倫理 原始仏教 VII』
- 第18巻 『原始仏教の社会思想 原始仏教 VIII』
- 第19巻 『インドと西洋の思想交流』
- 第20巻 『原始仏教から大乘仏教へ 大乘仏教 I』
- 第21巻 『大乘仏教の思想 大乘仏教 II』 第22巻 『空の論理 大乘仏教 III』
- 第23巻 『仏教美術に生きる理想 大乘仏教 IV』
- 第24巻 『ヨーガとサーンキヤの思想 インド六派哲学 I』
- 第25巻 『ニヤーヤとヴァイシェシカ思想 インド六派哲学 II』
- 第26巻 『ミーマーンサーと文法学の思想 インド六派哲学 III』
- 第27巻 『ヴェーダーンタ思想の展開 インド六派哲学 IV』
- 第28巻 『インドの哲学体系 I 『全哲学綱要』 訳註 I』
- 第29巻 『インドの哲学体系 II 『全哲学綱要』 訳註 II』
- 第30巻 『ヒンドゥー教と叙事詩』
- 第31巻 『近代インドの思想』 第32巻 『現代インドの思想』
- 別巻1 『古代思想 世界思想史 I』 別巻2 『普遍思想 世界思想史 II』 別巻3 『中世思想 世界思想史 III』
- 別巻4 『近代思想 世界思想史 IV』 別巻5 『東西文化の交流 日本の思想 I』
- 別巻6 『聖徳太子 日本の思想 II』 別巻7 『近世日本の批判的精神 日本の思想 III』
- 別巻8 『日本宗教の近代性 日本の思想 IV』

上記で黄色にマークした巻(計19巻)を図書館から借用して目を通したのです。

神奈川県立図書館からの最大貸し出し冊数は10冊、横浜市立図書館からのそれは6冊ですから、途中で差し替えしながらの閲覧でした。

ある時期16冊が揃った時に記念に撮影した画像をご覧ください。



3. ジャータカ

捨身は、釈尊の前生譚(ジャータカ)の中で語られているのですが、

『中村元選集(決定版)』の第20巻 『原始仏教から大乘仏教へ 大乘仏教 I』

の中に、ジャータカの要約を見付けたので、それをご覧に入れます。

(仏教信仰の普及)

赤枠をクリック願います。

その中から抽出します。(pp.52-53)

『ジャータカ (Jataka)』とは、釈尊の本生譚すなわち前世の因縁の物語のことである。

これは様々な經典のなかに説かれているが、実際には、仏教が発展していた時代に民衆のあいだで一般に流布していた色々な物語や説話を釈尊の過去世に当てはめて伝えているものである。

インドでは古い時代から、人間は肉体が死んでも靈魂というものが次の生存、さらに次の生存へと移り変わっていく、という輪廻転生の思想が、ゴータマ・ブッダの出る以前からインド一般として培われていた。また、前世において行なったことが現在の自分になんらかの関わりあいをもってくるといふ善悪の因果律の観念、因果応報の思想が、釈尊の出る以前からインドにはあった。すなわち、当時のインド人一般の宗教的通念によると、いかなる偉人といえども、過去世には輪廻していったの生涯を経過し、業の因果律の制約を受けているということになる。』

4. インド史

このゴータマ・ブッダ(釈尊の事)以前からあったという輪廻転生の思想の原点を本選集全体の中で探る事にしました。

その原点探求の為には、先ずインドの歴史の概略について理解が必要ですが、私を含めてインド史に詳しい人は少ないと思います。

それで私の知識を整理する為もあって、上記第5～7巻の中から必要部分を要約して見る事にしました。

上記第5～7巻『インド史』は紀元前3000年頃栄えた「インダス文明」から6世紀「グプタ王朝」の滅亡あたりまでを7編に分けて取り扱っているのですが、その各編の初めに3頁ほどの「時代の概観」なる項を設けていて、中村先生も手っ取り早く知りたい方に勧めています。

それで、その中から第1編「インダス文明」からインドで仏教が最盛期を迎えた第4編「マウリヤ王朝」までの「時代の概観」をここに掲げさせて頂く事にしました。少し長いが関心をお持ちの方はお付き合い願います。

----- 第一編 インド文明の出現

アーリア人が侵入して来る以前にインドにはすでに他の諸民族が居住し、それぞれ異質的なまた程度の異なる諸文化を発達させていた。そのうちでも特に注目すべきものはインダス文明であろう。

今世紀にインダス河流域の発掘によって知られたことであるが、西紀前三〇〇〇年よりも以前に始まり三〇〇〇-二〇〇〇年ころにこの地方に一民族が生存し、整然たる一定の都市計画のもとに宏壮な都市を建設していた。

またグジャラートの海岸ローダルや首都デリーの近くからも近年この文明の遺跡が発見されたので、この文明は非常に広範囲にひろがっていたことがわかる(これら周辺の遺跡は西紀前一五〇〇年ころまで続いたと想定されている)。

インダス文明においては高度の銅器時代文明が成立しており、メソポタミア文明との興味ある類似を示している。住民の一部は農耕および牧畜に従事していたが、他の一部は諸外国との交易に従事していた。ただこの文明の文字がいまだ解読されていないので、この民族の思想を知るよしもないが、後世インドの民間信仰と密接な関係があるらしく、地母神の像やシヴァ神の像の原型らしい

ものや性器崇拜の形跡も認められる。樹神崇拜や動物崇拜も行なわれ、特に牡牛が崇拜の対象とされた。また禪定の修行や沐浴も行なわれていたらしい。大きな水浴場が発見されている。しかし寺院・殿堂・祭壇ではなく、また祭具も見当たらない。元来のアーリヤ民族と信仰を異にしていたことは確かである。

アーリヤ人が侵入して来たときインドには種々の先住民族が生存していた。褐色・短身・低鼻の民族であったムンダ人が北部インド一帯にひろがっていたことも、ほぼ確実な事実である。現在でもムンダ人の諸種族が奥地に存在しているが、彼らは一般インド人と習俗を異にするので、現代でも問題が起きることがある。彼らは一般インド人よりもさらに生活水準が低く、差別待遇を受けている。

しかしアーリヤ人にとって主要な敵対者はドラヴィダ人であった。彼らは平原の諸所に小村落を形成し、母系的な家族制度と部族の構成による集団生活をいとなみながら定住していたが、なお銅器文明の段階に留まっていたために、鉄の武器を使用したアーリヤ人によって征服・圧倒されてしまったと推定されている。彼らは共同社会の守護神として女神を崇拜し、また性器崇拜、蛇神および樹木の崇拜をも行なっていた。インドに侵入して来たアーリヤ人は、最初のうちはこれに対して嫌悪の情を懐いたが、後にそれらはインド諸宗教の民間信仰の中にもいちじるしい影響を及ぼしている。

アッサム、ベンガルの一部、ナーガランドには蒙古系の種族が住んでいて、彼らも一般インド人とはいちじるしく習俗を異にしている。

第2編 氏族制農村社会

アーリヤ人は西洋人と同じ祖先に由来する人種である。その原住地については学者のあいだで種々論議されてきたけれども、いまだ決定的な結論にはいたっていない。

彼らは遊牧民としての生活を送っていた。家畜の名称に関してはインドヨーロッパ諸言語のあいだにしばしば類似性が見られるが、穀物の名称に関してはほとんど類似が認められない。

時代の経過とともに、アーリヤ民族は原住地である草原を出て他の地方に向かって移住を開始した。西方に向かって移動した諸部族はヨーロッパに定住してヨーロッパ諸民族となった。また東方に向かって移住した諸部族は、おそらく西ドルキスタンの草原地帯に数世紀間定住していたらしいが、後にその一部が西南に移動し、イランの地に入り、アーリヤ系イラン人の祖先となった。

また他の一部は東南に進み、ヒンドゥークシュ山脈を越えて西北インドに入り、パンシャープ地方を占拠したが、彼らはインド・アーリヤ人と呼ばれる。この侵入は西紀前一三世紀末のころであろうと推定されている。

そうしてこの新しい国土に居住して、おそらく前一〇〇〇年ころまでに『リグ・ヴェーダ』の宗教を成立させたと考えられる。彼らが土地を占拠するためには、黒色・低鼻の原住民とのあいだに猛烈的な戦闘が行なわれたらしい。その経過は『リグ・ヴェーダ』の神話の中に反映している。

アーリヤ人のほうが肉体的にも精神的にも強靱な民族であって、武器と戦術とにおいてすぐれていたために、ついにドラヴィダ人らを征服あるいは駆逐してしまった。

先住民は人数は多かったけれども、まったくアーリヤ人の支配下に隷属し、インド社会における隷民階級を構成するにいたった。したがって当時の社会においては、アーリヤ人よりなる一般自由民の階級と先住民である隷民の階級との区別が存しただけであって、いまだ後世のカーストのようなものは成立していなかった。ただ国王と司祭者とが多少優越的な地位を占めていたにとどまるらしい。

アーリヤ人の社会構成を見ると、家父長制度による大家族生活を営み、順次に大家族・氏族・部族を

構成していたように考えられる。部族の長を王と称する。王は一つの部族の中で選挙されたが、後には通常世襲となった。国王の権力は部族の人民集会および連合集会に表明される人民の意思によっていちじるしく制約された。当時のアーリヤ人は血縁関係・言語・宗教における共同を自覚していたが、しかし諸部族の間に政治的な統一は存在せず、したがって一つの統一的国家を形成することはなかった。

パンジャブ地方に定住していたアーリヤ人は西暦前一〇〇〇年ころから東方に向かって移住を開始して、ジャムナー河とガンジス河との中間の肥沃な平原を占拠した。この地方の肥沃な土地と酷熱多雨の気候とは農業に好適であったために、アーリヤ人は牧畜とともに農耕に従事した。そうして多数の小村落を建設し、司祭者を中心として氏族制農村社会を確立し、孤立的・閉鎖的な経済生活を営み、バラモン教の文化を完成するにいたった。

ここに形成された社会制度ならびに文化は典型的にインドの特徴を具えていて、その後のインドに広範囲にわたって影響を及ぼしている。征服された先住民は隸民として労役あるいは家庭の雑務に従事した。またアーリヤ人の中でも司祭者と王族とは特に独立の階級を形成し、各人の職業は世襲となり、彼らのあいだの階級的区別は次第に深められ、ここに四姓、いわゆるカーストの制度が成立するにいたった。四姓とはバラモン（婆羅門・司祭者）、王族（刹帝利）、庶民（毘舍）、隸民（首陀羅）の四階級を称する。バラモンが最も尊く、王族がこれに次ぎ、隸民は最も卑しいと考えられた。異なった階級のあいだでは結婚制限された（後代になると多数のカーストが成立し、異なった階級のあいだでは結婚と食事を共にすることが禁じられ、若干のカーストは不浄と見なされるにいたる）。

司祭者たるバラモンは社会の指導者として祭祀・教学を独占し、「人間である神」として尊崇された。祭費によって神を満足させ、布施によってバラモンを満足させるならば、この両種の神々は人を天界に導くという。 **バラモンは三千年余の歴史を通じてインド文化の担持者である。**

第3編 都市の成立——仏教興起の社会的基盤

ガンジス河上流地方に定住していたアーリヤ人はその後次第に東方に進出し、その中流地方に移住したが、それとともに社会的・文化的に大きな目ざましい変動が起こった。

まずアーリヤ人と先住民族との混血が盛んに行なわれた。ここに形成された新たな民族はもはやアーリヤ人の伝統的な風習・儀礼を忠実に遵守しようとはしないで、自由にほしいままにふるまった。彼らはヴェーダ文化を無視し、アーリヤ系の崩れた俗語を使用していた。彼らの定住した地方は地味肥沃で多量の農産物を産出したために、彼らの物質的生活は豊かでまた安易となり、物資が豊富になるとともに、次第に商工業が盛んとなり、多数の小都市を成立させるにいたった。

最初はこれらの小都市を中心に群小国家が多数併存し、そのうちの或るものは貴族政治あるいは共和政治を行なっていたが、それらは次第に国王の統治する大国に併合されてゆく趨勢にあった。大国の首都は繁栄し、そこには壮大な都市が建設された。当時はコーサラ・マガダ・アヴァンティ・ヴァンサの四国が最も有力であった。これらの大国においては王権がいちじるしく伸張し、王族は人間のうちでの最上者と見なされていたが、バラモンは従前ほどの威信をもっていなかった。また諸都市においては商工業が非常に発達し、貨幣経済の進展とともに莫大な富が蓄積され、商工業者たちは多数の組合を形成し、都市内の経済的実権を掌握していた。

旧来の階級制度は崩壊しつつあった。他方物質的生活が豊かに安楽になるにつれて、ややもすれば物質的享楽に耽り、道徳の頹廢の現象もようやく顕著になった。

こういう空気のうちに生活する人々の眼には、旧来のヴェーダの宗教は単なる迷信としか映らなかった。新しい時代の動きに応じて、唯物論者・懐疑論者・快樂論者・運命論者などが輩出して議論を闘わせた。また他方では享樂の生活に倦怠を感じ、出家して禅定に専念する行者も多数現われた。この時代に出現した

新しい。思想家たちを「つとめる人」（沙門）と称する。彼らに好都合なことには、当時は思想の自由および発表の自由が極度に容認されていた。当時の諸国王や諸都市はしばしば哲人たちの討論会を開いて彼らに自由に対論させたが、いかなる意見を述べても処罰されることはなかった。

当時の異端説は原始仏教聖典の中に六十二見としてまとめられているが、そのきわめて古い詩句のうちにプーラナ、パクダ、ゴースーラ、ニガンタ・ナータプッタという諸哲人の名がその各自の学説とともに言及され、またその他にアジタ、サンジャヤの二人を加えて「六師」とよぶこともあるが、これらの人々が当時の有力な思想家であった。

この時代に現われた諸教説はインド一般としては異端と見なされている。そのわけはヴェーダ聖典の権威を真正面から否定したからである。仏教もその興起した当初には、異端説の一つにほかならなかったのである。

このように、原始仏教ならびにジャイナ教、あるいはその他の自由思想が出現したのは、古代インド（ほぼ西紀前六、五世紀）において、ガンジス河の流域に都市が成立し、商業活動が急激に発展した時代においてであった。原始仏教信徒の社会層を調べてみると、商人および手工業者が圧倒的に多い。したがってこの時代におけるこれらの宗教の社会的基盤を解明することは、ひろく東洋文化の理解のためにも重要な意味をもっていると考えられる。以下においては原始仏教聖典およびジャイナ教聖典のうちの諸記述をもとにして、これを他の方面の資料から補って述べたいと思う。

第4編 統一的官僚国家——マウリア王朝

アレクサンドロス大王は西紀前三二七年に西インドに侵入し、諸所に都会を建設したが、磨下の将兵がそれ以上の行軍を頭強に拒んだので王は軍勢を引き連れてインダス河を下り、翌年西方に帰還して、前三二三年七月バビロンで客死した。

当時ガンジス平原における最大勢力はマガダ国であり、ナンダ王朝の支配下にあったが、西紀前三一七ころに同国の一青年チャンドラグプタが同王朝を覆して近隣諸国を併呑してマウリヤ王朝を創始した。彼はさらに西北インドからギリシア人の軍事的勢力を一掃し、侵入して来たシリア王セレウコス・ニカトールの軍隊を撃退し、ほぼインド全体にわたる最初の大帝国を建設した。このような成功は、当時インドの穀倉と称されていたマガダ国の豊かな財富と特殊な戦車などを利用したすぐれた軍事技術がその有力な原因となっていたのではないかと想像されるが、直接には彼の賢明な宰相カウティリヤの画策に負うところが多かったといわれる。

チャンドラグプタの孫、アショーカ（阿育、在位年限ほぼ前二六八～二三二年）のときにマウリヤ王朝の勢威は絶頂に達した。彼はさらに東南海岸のカリング国をも平定した。この王朝はアショーカ以後勢威が衰えたが、前一八〇年ころまで続いたらしい。諸外国と使臣を交換し、エジプト・シリア・ギリシアなどの諸国とも相当密接な外交交渉のあったことが知られている。

この王朝はインド史上空前の強大な国家権力を以て、重要な諸事業を遂行した。たとえばチャンドラグプタは全インドにわたって多数の公路を建設し、駅亭を設け、また約半里ごとに標識としての柱を建てた。またアショーカは各道路に沿って並木を植え、約三里半ごとに井戸を掘り、旅人のための休憩所を設けた。道路の主要交叉点には、国家の倉庫を建設し、物資を収納して緊急の際の用に供し、また農産物の増加をはかるために運河や貯水池を造った。

インド全体が史上はじめて統一国家に形成されたのは、実にマウリヤ王朝の時代（西紀前約三一七～一八〇年）においてであった。マウリヤ王朝を基準としてのみ、古代インドの歴史を構成し

想定することができる。 仏教は本来普遍的宗教としての性格を有するものであったが、現実に世界宗教となるべき活動力を与えられたのは、実にマウリヤ王朝のアショーカ王のときであった。

このように重要な文化的意義を有するマウリヤ王朝時代の国家体制ないし社会構成が、いかなるものであったか、それをここにおいて管見してみたい。 もともとインド文化史においては、王朝の占める意義は、他の諸文明国におけるように重要なものではないけれども、このような考察を行なうことは、社会的現実の解明のためにぜひ必要なことであると思われる。

第7巻 『インド史 III』には年表がついているので、参考までに上記に対応するところを下に掲げます。

年 表

*印を付したものは、おおまかな推定にもとづくもの。

年 代	政 治	文 化 現 象	他 地 域
西紀前3000— 2500ころ	インダス文明（ハラッパー、モ エンジョ・ダローなど）		3100ころ エジプト第一 王朝 2500ころ 古バビロニア 文明 1500ころ ハムラビ法 典ができる
1500ころ	インダス文明の衰退（ロータル など）		1500ころ クレタ文明の 最盛期
3世紀末	アーリヤ人の西北インド侵入 アーリヤ人がガンジス河流域へ 進出	*『リグ・ヴェーダ』成立	1800ころ 殷王朝が始ま る 1030ころ 周王朝が始ま る
1500—1000ころ		*ヴェーダ本集成立 *プラーフマナ、初期の古ラパ ニシャッド成立	814 カルタゴ建設 600ころ ポリスの成立 と発展 700 シナが春秋時代に 入る 6世紀末 アッシリアの

年 代	政 治	文 化 現 象	他 地 域
510ころ	ペルシア帝国のダレイオス王が インダス地方を併合		オリエント統一
500ころ	都市の成立 このころガンジス平原にマガ ダ、コーサラなどが繁栄	* 六師 ゴースーラ (566) マヘーヴィラ (471-516)	亮 アカイメネス朝 ペルシアの成立 聖 孔子が生まれる 亮 ローマ共和政の成 立
350ころ	アジャータシャトル王が即位 アレクサンドロスのインド遠征 マウリヤ王朝が始まる チャンドラグプタの治世 (1 55)	ゴータマ・ブツダ (527-483) パーニニ (350ころ) カウテイリヤ『実利論』	403 シナで戦国時代が 始まる 亮 マケドニアが興る 333 アレクサンドロス 死す
333ころ	チャンドラグプタがアヴァンテ イを支配する		
300	セレウコス・ニカトールがイン ドに侵入する		
180ころ	セレウコスとチャンドラグプタ が和解		101 イブソスの戦い(ア レクサンドロスの遺領の 分割)

100ころ	メガステネースがインドに来る	* 『カータカ・ウパニシャッ ド』『シウヘーターシヴァタラ ウパニシャッド』など	100ころ 日本が弥生時 代に入る
320ころ	ビンドウサーラ王の治世 (1 56)		333 ローマがイタリア を統一
260ころ	アショーカ王の治世 (153こ ろ)	仏教が全インドに広がる 上座部と大衆部の分裂	158 第二次ポエニ戦争 (148)
260ころ	アショーカ王が仏教に帰依		
250ころ	カリンガ国を征伐	* サーンキヤ学派が成立	
240ころ	教法の巡行が始まる	* 原始仏教聖典が成立 * カルパ・ストトラ (祭事経) が成立	
217-185ころ	ギリシア人の五人の王のもとに 使節を派遣		
250ころ	教法大官の制度を設ける		
217-185ころ	石柱詔勅を刻する	カーテイヤーヤナ (250ころ)	250ころ デイオドトス がバクトリア王国を建設
180ころ	アショーカ王が多数のストウ パを建立		180 アルサケースがパ ルティア王国を興す
180ころ	シムカ王の統治 (サータヴァ ーハナ王朝の初代)	スリランカに仏教伝来	
150ころ	クリシュナ王の統治 (サータ ヴァーハナ王朝の二代)		

5. 「ヴェーダ」から「ウパニシャッド」へ

5.1 ヴェーダ

ヴェーダとは、紀元前 1000 年頃から紀元前 500 年頃にかけてインドで編纂された一連の宗教文書の総称です。

その一部であるリグ・ヴェーダは、神々への韻文讃歌集で、インド・イラン共通時代にまで遡る古い神話を収録している。以下（中村 8 p.359）*

その中にはきわめてまれな例であるが、ある場合には、生まれ変わる、という思想も表明されている。輪廻の観念は、『リグ・ヴェーダ』のなかにかすかにほのめかされている。

『わたしはマヌであった。 またわたしはヌーリヤであった。 わたしは、いま、ことばに巧みなるカクシーヴァト仙人である。 わたしは、アルジュナの子クツァに力を加える。 わたしは詩仙ウシヤナスである。 われを見よ。

わたしはアーリヤ人に土地を与えた。 わたしは、献供をなす人に雨を与えた。

わたしは、音を響かせる水流を導いた。 神々は、わたしの意図にしたがった。

わたしは、〔ソーマの〕酒に酔って、シャンバラの九十九の城塞を一度にひっくり返して破碎した。

第一〇〇の城塞を、ディヴォーダーサ・アティティグヴァを助けたときに、〔かれの〕

住居として与えた。』

ただし、ここには普通の輪廻思想が表明されているのではない。

- (1) ここでは神が他の神または詩仙に生まれ変わったのである。 神でさえも生まれ変わると考えているところに、顕著にインド的な輪廻観の萌芽が認められる。
- (2) 神秘的体験をもっている人が前世を見通して回顧するということは、後世の仏典などにはよく見られることである。 その先駆思想がここに認められる。
- (3) 現代インドの知識人は、この詩句は輪廻思想を表現しているのではなくて、神秘的直観による、過去の聖者たちとの一体観を表明しているのだと解する。

だから全体としては、後世のインド思想の特徴である輪廻の観念はなかった。

したがって解脱の観念もまだ明確なたちでは現われていない。

5.2 ウパニシャッド

ウパニシャッドは、ヴェーダに含まれるもので、奥義書・哲学的な部分であり、インド哲学の源流でもあります。紀元前 500 年頃を中心に成立したと考えられるのです。

ここで始めて輪廻転生の考えが現れてきます。

中村元選集(決定版) 第9巻 『ウパニシャッドの思想』

に、その詳細が出ていますが、少し長すぎるので、ここでは、

竹倉史人著『輪廻転生』講談社現代新書 2015年発行

の引用で纏めてみる事にします。(あまり細かい論議に亘るところは適宜はしょっていますが)

竹倉氏は、現在東工大の博士課程に在籍との事(東工大で宗教を研究しているとは初耳)ですが、極めてユニークな学者の卵のようです。

中村元先生は東大の大学者で、検証された事に縛られ過ぎているように感じられます。

それでその議論は精緻ですが、切れ味には限りが出てきます。

そこに行くと学者の卵である竹倉氏の論理には、発想の飛躍がありますが切れ味を感じました。

輪廻思想の登場

古代インドの文献のなかに初めて輪廻思想が登場するのは、いわゆる「後期ヴェーダの時代」

(紀元前1000～前500年頃) に編纂された最古層に属する2つのウパニシャッドにおいてです。なぜこの時代になって、古代インド人—この時代になるとアーリア人と先住民との混血もかなり進んでいました—の死後論のなかに生まれ変わり思想が登場したのか。

現在では、当時のインドの基層文化に注目し、そこにあった生まれ変わりの観念が輪廻思想の成立に影響を及ぼしたという見方が優勢になっています。

もう一歩踏み込んで言えば、これは基層文化、すなわち非アーリア系の先住民のあいだにあった<再生型>の生まれ変わり観念がアーリア人のヴェーダの宗教と混淆することによって、<輪廻型>の生まれ変わり思想が誕生したというシナリオになります。

このシナリオのひとつの論拠は、『ブリハッド=アーラニヤカ』などのなかで初めて輪廻思想が語られる場面にあります。

このシーンでは、ヴェーダに精通する若きバラモン、シヴェータケートゥが、インド北部に暮らすパンチャーラ族の集会に出席するのですが、ここに、ある「逆転現象」が見られるのです。

シヴェータケートゥはこの集会で、パンチャーラ族の王ジャイヴァリから

「人間は死んだらどこへ行くのか」、「どうしてあの世は死者でいっぱいにならないのか」など5つの質問を受けます。

シヴェータケートゥは弱冠24歳にして全ヴェーダを学び終えたエリートのバラモンなのですが、なんとこの質問のひとつも答えることができませんでした。

公衆の面前でバラモンのプライドを傷つけられたシヴェータケートゥは、悄然として家に帰り、父・アールニに憤懣をぶちまけます。

しかし、シヴェータケートゥから質問の内容を聞いたアールニも、ひとつとしてその答えを知りませんでした。そこで父みずから、ジャイヴァリ王のもとへ赴きます。ジャイヴァリ王はアールニを丁重に迎え入れるのですが、息子に話した質問の答えを教えるように頼まれると、それは「神々の世界に属する話」だといって答えることを拒否しました。

すると、アールニは「師よ、私はあなたの弟子として参りました」といってジャイヴァリに頭を垂れて教えを乞います。ついにアールニの懇願に根負けしたジャイヴァリは、

「この知識はこれまで一度もバラモンに伝わったことのない、クシャトリアだけの教えである」と断ってから、5つの質問の答えである「五火・二道説」を披瀝します。ここで明かされた奥義こそ、インド思想史上に初めて登場した生まれ変わりの観念であり、その後の教説の原型となったものです。

「五火・二道説」については、竹倉書に詳細が記されていて、中村書には、より詳細がありますが、ここでは、「ウィキペディア」の解説で済ます事にします。

『五火説とは、五つの祭火になぞらえ、死者は月にいったんとどまり、雨となって地に戻り、植物に吸収されて穀類となり、それを食べた男の精子となって、女との性的な交わりによって胎内に注ぎこまれて胎児となり、そして再び誕生するという考え方である。

二道説とは、再生のある道(祖霊たちの道)と再生のない道(神々の道)の2つを指し、再生のある道(輪廻)とはすなわち五火説の内容を示している。』

靈魂の二重性

これは非常に奇妙な場面と言わざるを得ないでしょう。宗教的な知識を独占し「人間である神」とまで謳われたバラモンが、クシャトリア階級のジャイヴァリに頭を下げて死後世界について教を乞うているのです。

ウパニシャッドが描くこの逆転の場面は、生まれ変わりの観念がバラモンではなくクシャトリアによってもたらされたことを示唆しています。

それは、当時ジャイヴァリ王が暮らすパンチャーラもパンジャープ地方の東部に位置し、先住民との混血が相当に進んでいた地域でしたが、バラモン階級だけは純血を保っていた事を示しているでしょう。(竹倉書)

例えば、『またすぐれたバラモンであるための条件としては、五つが立てられている。

その第一は、

- (1) バラモンであって母方に関しても父方に関しても生まれがよく、血統が清らかで、七世の祖先にまで通ってもこれからそれず、血統に関して他人から非難されることがない。』

(中村 30 p.105)

古代インドには、モンゴロイドや原オーストラロイドなど、複数の系統の先住民が暮らしていたことがわかっています。なかでも、アーリア人が東方進出の際に頻繁に混血したのが、当時全インドに定住していたドラヴィダ人です。

古代のドラヴィダ人は農耕を中心とした母系制社会を形成していました。20世紀中葉までは、インド中部から南部にかけて比較的古老のものと思われる伝統文化が残っており、多くのドラヴィダ系の村落で地母神などの女神崇拝が見られました。

興味深いことは、インドに居住する一部のドラヴィダ人に、現代でも<輪廻型>ではなく<再生型>に近い生まれ変わりの観念が見られるという事実です。インドの生まれ変わりだからといってすべてが<輪廻型>なわけではないのです。(竹倉書)

中村によると、

『おそらくアーリア人が進入して来る以前にガンジス河流域に住んでいた原住民がなにかしら輪廻のようなことを信じていたのであろう。そうしてアーリア人がかれらを征服してやがて融合したときに、この観念を採用して独自の輪廻の教義につくりなしたのであると考えられている。

ただ最初のうちは輪廻転生としては考えられなかった。のちになって、善または悪の行為の報いがあるという確信にもとづいて輪廻の観念が成立したのであるが、最初のうちは、来世に報いが現われると考えていた。後代になって、現世においても報いがあると考えられるようになったのである。

すなわち、インド人は、意図をもって行なつたいかなる行為も、現世または来世において報いを引き起こすと考えて、応報の理論を詳細に体系化したのである。』(中村 9 p.679)

6. 仏教への導入

釈尊(BC463~383 ころ)自身が輪廻を認めていたかどうかは議論があるところだそうですが、いずれにしても、仏教にも輪廻の考えが取り入れられ、独自の展開を起こすこととなります。

その一つは、哲理に関するもので、「空」の思想の下に難解な論理を展開して行きます。しかし、それは大衆の理解を遥かに超えていて、仏教発展のためには、「ジャータカ」の力が大きかったと思われます。

南部仏教(小乗)で作られたパーリ語の聖典の内に 547 のジャータカ物語が存在するそうですが、それらのすべては、下記で見る事が出来ます。

中村元監修 ジャータカ全集 全 10 巻 春秋社発行 1984～

その巻 1 を神奈川県立図書館から借用しています。

巻 1 には、因縁物語(ニダーナカター)という遥か昔から何十回と生まれ変わってきた釈尊の輪廻転生物語、と第一～七十話が載っています。

関心のある方には読み応えがあると思います。横浜市立図書館にもあります。

本邦には、上記全集発行まで 547 話が纏まって入ってきた事はなかったようですが、部分的に、**施身聞偈**や、**捨身飼虎**などが入って来たのでした。

7. 弥生文明と南インド

以上を総括すると、西北部からインドに侵入したアーリア族は、「ヴェーダ」という優れた宗教思想を持っていたが、そこには輪廻転生の姿は見られません。

その後アーリア族は、ガンジス流域に進行するが、そこで原住民(ドラヴィダ族)と混血する中で、彼らの「再生」の考えを取り入れて、「ウパニシャッド」の中で「輪廻転生」の考えを纏めるに至ったと考えられます。

そして、やがて「バラモン」に反発して発生した諸思想の一つである仏教も釈尊の死後(?)、その考えを取り入れたと考えられるのです。

そして、仏教の伝来(AD538)のあたりで本邦にも輪廻転生、捨身の考えが入って来たと考えられるのです。

さらに、ドラヴィダ族と本邦は、それよりかなり以前、弥生時代前期(BC5 世紀頃)、ドラヴィダ族に含まれるタミル人が、水田稲作、金属(鉄)技術、機織りなどを持って言葉を含めて本邦に入っていたという説があります。

日本語のタミル語由来節を唱えた大野晋博士(1919～2008)によるものであります。

大野晋著『弥生文明と南インド』岩波書店 2004 年発行

大野氏は、日本語はクレオール・タミル語であるとしているのです。

ウィキペディアによると『クレオール言語とは、意思疎通ができない異なる言語の商人らなどの間で自然に作り上げられた言語(ピジン言語)が、その話者達の子供達の世代で母語として話されるようになった言語を指す。』とあります。

日本語のタミル語由来説には、反論も多いようですが、大野氏はさらに本書で

「日本の信仰、倫理思想の根源は南インド、殊にタミルの巨石時代の大きな影響の下に成立したと考えざるを得ない」とまで主張しています。

私はこの考え方を拡張して、民族の行動様式は用いている言語に強く依存する筈であるから、言霊の国日本の成立にもタミル人の影響は極めて大きかったと思うに至りました。

大野氏の考え方を発展して、タミル語で古事記や日本書紀を読み解くことで、これまで分からなかった

言葉の意味を解明するという研究も有ります。

田中孝顕著『日本語の真実 タミル語で記紀、万葉集を読み解く』 幻冬舎 1980年発行

この書によると、タミル人は紀元前 800 年頃はガンジス領域に住んでいたが、アーリア族に圧迫され、南インドに移動したとあります。

その中でタミル人の海外進出の機運も高まり、その一部がガンジス流域から直接マラッカ海峡、南シナ海を経由して日本列島に到達した事も考えられるとしています。

8. 終わりに(アジアは一つ)

昨年夏発想した私論「仏説大東亜戦争」構築以来、思いつくままに乱読と考察を重ねてきましたが、ここにきて、更に私論の域を拡大出来そうに思えてきました。

これもまた皆さんから空想と笑われるものかも知れませんが。

日本民族の行動様式は温和な風土によって形成されたところも大きいと思いますが、用いている言語の構造によるところも大きいと思います。

日本民族は、その言葉を磨いて「言霊」の域にまで高めました。その洗練の度合いと情緒性の深さは「源氏物語」、「枕草子」、「平家物語」などを思い浮かべれば理解出来るでしょう。

その言語構造の根源を、インド原住ドラヴィダ族に含まれるタミル人から直接入手した日本民族は、恵まれた風土の中で言霊の完成度を独特な形で高めて行くのですが、それから数百年後に再びドラヴィダ族が持っていた「再生」思想から発想を得たアーリア族バラモンが哲学書「ウパニシャッド」の中に構築した「輪廻転生」思想も、釈尊が構築した仏教の枠組みに乗った形で中国、朝鮮半島を経由して受け入れる事が出来たのでした。

アジアの最東端にある我国は、弥生前期(BC5世紀)にタミル人から言語、信仰、倫理思想の根源を獲得し、更に仏教伝来(6世紀)とともにアジア諸民族が共同して構築した「輪廻転生」思想、「捨身供養」の重要性も受け入れたのでした。

そして、この共同幻想が純粋な形で蓄積されていった日本本民族が、欧米に征服され苦しんでいたアジア民族の解放に向かって捨身供養として爆発したのが「大東亜戦争」という事になったのだと思います。

どうやらここまでたどり着いて、正しく「アジアは一つ」の私なりの理解を得た心地がします。岡倉天心が考えたものとはだいぶ違うかも知れませんが。

昨年夏の「仏説大東亜戦争」以来、「捨身」思想の根源を探ってきましたが、

どうやら「アジアは一つ」にまで到達することが出来、ある程度の満足感を得る事が出来たと思う次第です。

これで昨年来の「仏説大東亜戦争」に関連する諸検討は納める事にしたいと思います。

終わりに当たり、私の放浪にも似た検討作業に永らくお付き合い願った皆様に感謝申し上げます。

註 * : (中村 8 p.359) は 中村元選集(決定版) 第8巻 『ヴェーダの思想』 359頁 以下同様

完